

『東明』

朝鮮洋楽の夢幻的来歴 2

(1922年12月3日付)

[1901年]陰暦7月25日は、高宗皇帝の萬寿聖節である。2-3ヶ月前から進宴都監が平壤・普州・大邱・咸川など美人や芸妓が多くいる地域をことごとく廻り、全国の名妓を寄せ集め、歌舞を練習させ、呈才[宮廷の宴会で行われた歌舞]をさせ、とソウルは全てこの進宴一色で、騒ぎ立てていた。ところで、新設されて間もないが、洋楽がこの祝宴から抜けてはならない。1-2曲でも急ぎ立てて教えようとしても、ありとあらゆる曲折がそこにはあった。まずロシア製は、ドイツ製と音調が異なると合わないとし、オーストリアのウィーンにある「ツィンマーマン」楽器会社に再び注文しておいて、取り敢えず既存の楽器であたふたと教え始めた。[エッケルトは]後頭部が平らだと賢くないと隊員を追い出し、また楽器の構え方を間違るとピンタをする。今度は、隊員が怖がり我先に逃げる。こうした波風が収まり、昼夜休むことなく、ネズミの穴に牛を追い込むごとく教え込んだ。

軍楽とは、士気を掻き立てるところか、士卒をこき使うため、恨みの声が高まった。ともかく、幸いに萬寿聖節の期日まではイタリア歌曲の中から一番簡単な1曲と、ドイツ行進曲の中からまた1曲を選び、2曲を上手く吹けるようになった。聴いたこともない洋楽を僅か3ヶ月で学んだのはとても驚くべきことである。この時から漸く朝鮮人の音楽的才能が内外に知られることになった。とにかく、待ちに待った萬寿聖節の日となった。これまで死ぬ

気で学んだことをこの賑やかな進宴でお披露目した軍楽隊にとって、その当時はこれ以上光栄なことはなかった。この日初めて、英国式に赤い帽子、黒いチョゴリ、赤いズボンを着て華麗な咸寧殿の前でパンパンと音を鳴らした。これはまさに、朝鮮では初めて聴く西洋管楽であろう。

さらに、当時5歳であった今の王世子、当時の英親王はこれに特に興味を示し、それ以来、新しい曲をマスターすると当たり前のように宮廷にて奏楽を披露させ、それだけでなく電話越しにも聴いたという。そうして、その冬には国歌を作曲し、周知の通り歌詞は「上帝はわが皇帝を助けよ、聖寿の無疆を祈る、海屋籌を山のごとく築き上げ、威権が世界に鳴り響き、とこしえに福祿が日に新たにならんことを、上帝はわが皇帝を助けよ」となり、エッケルトがそれに作曲した。このように国歌が完成した時は、各国代表を招いて大観亭で盛大に披露し、曲の出来を評するようにした。もてなしの後に評価を求めても、賞賛しかないだろう。宴の場ではひっきりなしに「すごい、素晴らしい」といいながらも、後でこそそそと粗探しをする。国歌というのは、雄壮で快活でなければならぬが、これは完全に陰音階で組織されているため、悲しげな調子にしかならない、というのが彼らの陰口であった。しかし、つんぼ先生たちにわかる訳がない[聞く耳をもたないの意]と無視し、他はみんな良いというので、大阪にある印刷所に委託し一千部も立派に印刷し配布して、入港する外国船便を利用し、あまねく世界へ宣伝した。こうして、その功労が認められ、エッケルト氏には三等太極勲章が与えられた①。これは氏が日本で五等旭日章を与えられたことを四等だったと偽ったためである②。そして楽卒に対しては、当時の憲

兵や元帥府兵丁のように本俸白銅貨五元五十銭に五十銭を上乗せしてくれた。また良く食べないといけなくといひ、一般兵丁よりは優待してくれた。一般兵丁は、おかず代二銭五厘で所謂「もやしソルロンタン」一皿、キムチ一皿という貧しい食膳が普通であった。それも餉官令監③以下、多くの令監たちが一儲けしようとしめない限りは、何とか暮らしを立てることは可能だが、二銭五厘から三分の一をも、あれこれと搾り取られるので、途方もなく粗食であった。一方、楽卒には内蔵院秘庫から二十万両を調達し、その利息でおかず代を賄うようにした。そのうち、十萬両はエッケルト氏に渡され、残りの十萬両は、当時内蔵院卿であった朴鋪和が長らく利子を得るための資本として騙し取ったというの有名な逸話である。しかし、それでも足りないといひ、エッケルト氏は再び軍部と交渉し、楽手奨賞金という名目で毎月四十元ずつ支給してもらった。それを月末に、勤務態度に従って賞金を分配し熱心に奨励した。このように上からの寵愛を受け、さらに楽手の奮起もあり、その翌年には50名を増員し、100名の一中隊を編成するようになった④。

この年[ママ⑤]ちょうど獎忠壇を建て、毎年3月と9月の中丁日には祭祀を行うことになり、軍楽隊では弔曲を学び忠魂を慰霊した。これが軍楽隊創設以降、軍事上の奏楽の始まりであり、民衆のための活動の第一歩であった。そして「軍楽隊の音楽に合わせて捧げ銃のみする」という童謡が生まれたのもまさにこの時のことであった。こうして、楽隊が徐々に長足の進歩を遂げるようになり、外国人による驚嘆は言うまでもない。ある時、宮中宴会の席上で日本公使の林権助がロシア公使のA.I.パブロフ[Pavlov]に、朝鮮人と日本人を比べると西洋音楽において

技能が長けているのはどっちですかと聞いたら、日本人と比するより朝鮮人は東洋で一番であると、言下に答えたことがあったそうだ。また、その後イギリスの『タイムズ』紙の記者某氏が来遊して軍楽隊の演奏を聴いて帰国した後に、「朝鮮人は特に音楽上の技能が豊富で、朝鮮の優れたものは農業の次には軍楽といえる。朝鮮の軍楽隊は設立から僅か数年で、学習した曲種こそ多くはないが、その奏法はイギリスのヴィクトリア管楽隊やアメリカのソーサ[J.Ph. Sousa]管楽隊に比して遜色がない」という記事を『タイムズ』紙に掲載し、その記事は当時の日本の雑誌にも掲載された。

続いて、タブコル公園(現バゴダ公園)の傍に海関附属病院として改築して設置した洋屋を軍楽隊用に改築し、光武7年(1903)の春、三軍部構内からここに軍楽隊を移転した⑥。本来、このタブコル公園の周囲は人家が多く、石亀が乗っている大円覚碑や円覚寺塔も荒れ果てていた。こうして、子どもを授かるよう塔や亀にクッ[巫俗儀礼]を行ったり、祭壇に供え物を捧げたり、馬鹿騒ぎをしていた。さらに、一晚に何百回も瓦屋を立てて、壊すことを繰り返す暢気な大勢の軍人たちは、昔も今も変わりなく集まって、亀像の鼻にタバコを突込む祈願をしたり、寺を建てたりして、結局、その家の主人の腹を肥やしたという。こうした滑稽な話は365日話しても尽きないが、とにかく由緒ある公園がどうなったかという最初海関総税務師の柏卓案氏が税関収入の中からその附近の民家を買入れ設置したのである。しかし、公園とは名ばかりで煉瓦を高く積み、四方を閉めておいたが、軍楽隊が移転してからやっと公園の真ん中に朝鮮式の八角亭⑦と音楽堂を新築した。